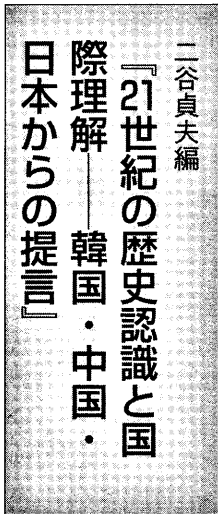


●図書紹介●



わが国のここ数年の中国や韓国との外交関係のきしみや葛藤を考え合わせると、本書の意義深さと厚重さがいっそう明瞭になってくる。なぜなら、本書全体を貫く視点が次のとおりであり、しかもその内容が紛れもなく充実しているからである。「韓・中・日3国の相互理解と国際交流をいかに平和共存の観点から増進していくのか」という、この、21世紀における東アジア諸国民共通の課題に対して、私たちは、いかなる歴史認識を築き、国際理解を深めていけばよいか」（9頁）という視点である。

本書の主要部分は、6部で構成されており、その概要は次のとおりである。「Ⅰ アジア認識と世界史学習」（編者の二谷貞夫氏執筆による6編収録）、  
「Ⅱ 歴史教育の学び合い——日韓の相互理解をめざして」（加藤章・二谷貞夫・梅野正信の3氏による座談会記録とソウル大学校名誉教授李元淳氏の論文を収録）、「Ⅲ アジアにおける日本認識と歴史教育」（韓国・中国の研究者等による論文7編収録）、以降編者から大学院で指導を受けたり、研究上交流のあった日本の方々が寄稿された3部からなる。  
「Ⅳ 国際理解と歴史認識・社会認識」（7編）、  
「Ⅴ 日本における歴史教育実践とアジア認識」（7編）、「Ⅵ 『内なる国際化』とアジア交流」（7編）である。

本書の中で、筆者が強い刺激を受け、しかもひしひしと日本の歴史認識や国際理解のゆがみや不十分さを正すべきことを痛感させられたのは、編者自身が執筆された諸論稿である。まさに、世界史教育の新機軸を継続的に追究してこられた編者の真骨頂をみる、視野の広いそれでいて鋭利な論究が展開されている。たとえば、次の表現にそれが象徴的である。

「世界史学習がお互いの民族の恨みを超えて、全アジアの未来と平和を築くものでなければならない。基本的には、基本的人権を尊重し民主的原則に則った政治秩序を維持する社会という観点に立って、『個人の尊厳と人間の平等』に基づく日本社会を築くことである」(18頁)。また、編者自身の論稿の中でとくに注目したいのは、歴史教育の研究者としてばかりか、自ら実践者としての豊かな経験と知恵がにじみ出ている点である。とくに、2003年3月に中国上海市立中学校で自ら実施された世界史の授業についての論稿は、編者ならではの含蓄がある。

以上の他にも、筆者が本書から多くを学び取る必要性を感じたのは、本書に執筆された韓国と中国の研究者の方々が大変厳しい政治状況の中で、編者らとともに東アジアの歴史認識や歴史教育の過去と未来の問題に実に忍耐強い関心と努力を払われてきたことである。これらの方々の冷静で深い配慮に満ちたメッセージを、われわれ日本の学術・教育関係者はしっかりと、しかも謙虚に受け止めねばなるまい。

その他、日本の執筆者によるIV～VIの各部に収録された全21編の諸論稿は、多面的な角度から歴史認識・社会認識・歴史教育実践に関する鋭い問題分析と課題が提起されており、いずれも日本の良識派の学識や実践力を改めて確認できる内容であった。

以上のように、本書は編者二谷貞夫先生の上越教育大学での17年間の研究・教育活動を貫く世界史認識の深さと重みを感じ得ることができる高著である。歴史教育・社会科教育を専門とする方々はもちろん、広くわが国教育関係者に推奨したい貴重な著書である。

(上越教育大学 西 稷司)

●明石書店, A 5判, 407頁, 5,250円(税込)